

暮らしの中の生きものたち

赤松

マツ科にはマツ属、トウヒ属、カラマツ属、モミ属、ツガ属など針葉樹の半分以上の種類が含まれています。マツ属の中、ゴヨウマツは北日本に、ハイマツは高地に、リュウキュウマツは沖縄に分布しているため、西日本で見られるものは、海岸沿いに目立つクロマツと、京都盆地を囲む山の稜線にも多いアカマツです。

マツが痩せ地にも生育するその理由は、外生菌根菌との共生にあります。

そもそも針葉樹は温暖で多湿な中生代に栄えたものですが、それが寒冷地にも乾燥地にも見られるわけは、その後、地球に訪れた厳しい気候にあるとされます。スギやヒノキなどは暖かく雨の多い土地に退いて生き続けた仲間、マツ科は寒冷化やそれに伴う乾燥にも適応して生き残ってきた仲間とされているのです。現生の針葉樹たちがそれぞれ性質を異にしている背景を感じさせられます。

厳しい環境下で生き残ったマツたちの大作戦こそ、菌類と固い共生関係を結ぶことでした。樹木の生長に必要な窒素やリンなどの養分を、岩にさえ菌糸を伸ばせる菌類に集めてもらい、その代わりに、光合成でつくりだした糖分を、従属栄養者である菌類に分けてあげるという相利関係を築いたのです。そのため、アカマツは花崗岩などの地盤でも育つ力を持ち、攪乱後の明るい場所に多い先駆種にもなっています。

西日本の植生においては、人口が増え始めた弥生時代後期頃から少しずつアカマツが優勢となっていったようです。材は建築に土木に使われ、落ち葉も焚き付けに集められ、やがて「里山利用」の主人公となったのでしょう。ところが、そんな長きに亘る利用が戦後の燃料革命・肥料革命によって失われて森の藪化が進み、落ち葉も掻き出されずに土壌が富栄養化すると、アカマツは他の樹木に負けて生育が悪くなりました。樹勢が弱り、高齢化したところに、外来の「マツ枯れ」が襲来しています。

それでもやはり、アカマツは西日本の低山の尾根に欠かせない存在です。晴れた秋の日、枝に下向きに付いた松カサが開くとタネが滑り出し、風に乗って飛んでいきます。翼を持つタネは回転しながらゆっくりと落ちて、明るいところに着地したものはそこが乾いていても育ち始めます。アカマツは水分を吸い上げる力が強く、根は広く深く張り、水分を逃がさない葉の構造（針形で表面積が小さい、ワックス層で被われている、気孔が陥没している）をしているのです。幹に脂分を含むことも乾燥対策なのかもしれません。

脂分が多いマツの薪は優れた燃料です。火力の必要な鉄づくりに、陶器づくりに、塩づくりに、そして灯りとしてもアカマツは日本の歴史を支えてきました。江戸時代にはマツ炭の火力を使って「刀鍛冶」の技術が発展したそうです。また、マツ材の床板は拭き込むほどに光沢が出るのが知られ、寺院などによく使われています（法然院の新しい床もマツの板で張られています）。

手入れをしている善気山の尾根では実生からの若木がすくすくと育ち始めていて、それらは台風でも倒れた様子はありませんでした。送り火を支えるアカマツが、力強く見られ続けて欲しいものです。



アカマツの実生
2011.10.30



若木 2016.6.8



若木 2018.6.3



20年ほど前の写真
アカマツが山際にも
大の字下にもたくさん見られる



山際にアカマツが見える
大の字下は以前ほどには多くない
2018.9.23



北尾根にて
ソゴの倒木と
残っているアカマツ
2018.9.6